The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

小尾郊一先生の思い出

狩野充徳

私が初めて小尾郊一先生にお目にかかったのは、昭和四十年（一九六五）四月九日であったと思います。四月八日が入学式でした。その翌日、広島市東千田町に在った文学部二階の大講義室で小川二郎文学部長（英文学）の講話などを聴いて、入学宣誓式を済ませました。その後、どなたかに案内されて一階の玄関に降りて左へ曲がり、事務局を右に見て、突き当たりの階段の所を左へ曲がり、十五メートルほど進んだ右側に中国文学専攻（翌年から中国語学中国文学専攻と改称され、定員が五人から十人となる）の研究室の入り口がありました。そこを我々新一年生（今は二年次に分属します）五人が、電気が点いていても薄暗い研究室に入って行きました。左右は中国の書籍がびっしりと並んだ書架です。その間を机や椅子を置いている最も奥の場所へと進み、そこに坐って期待と緊張の面持ちで待つ内に、やがて西谷登七郎・小尾郊一・白木直也・横田輝俊・王超の五先生が入って来られました（この時には助手ポストは空いておりました。渡辺さんというおとなしい、若い女性が今の事務補佐員のようなことをされていたと記憶します）。最長老の教授西谷先生、八歳若い教授であった小尾先生が廊下側を背にして坐られ、左右に助教授の白木・横田両先生と外国人教師王超先生が坐られました。始めに西谷先生が挨拶をされたか、或いは小尾先生が挨拶をされたか、覚えておりませんが、この時に初めて小尾先生のご尊顔を拝したのでした。その後、学生の自己紹介があり、全員の先生が何か挨拶をされたと思いますが、残念ながら記憶にありません。何しろ、それまで大分県の高等学校の田舎生徒であった者が、人口数十万にはあった都会の広島に出て来たばかりで、しかも大学という最高学府の、博士と言われる先生方にお目にかかる訳ですから、緊張しないはずはありません。今頃と違って、当時先生方には威厳が感じられましたし、学生は学生で師に対する絶対的な尊敬の念があったのです。

当時、一年生は文学部の先生による専門の授業が一コマもありませんでした。ただ、毎週金曜のお昼に三十分ほど各自が持参の昼食を摂りつつ談話する「会食」の時

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に、定期的に先生方にお会いすることができました。勿論恐れ多いので、院生の安東諒さん（徳島大学教授。昔の誼みで、「さん」でお呼びすることをお恕し下さい。以下同じ）や学部生の西紀昭さん（熊本学園大学教授）・豊福健二さん（武庫川女子大学教授）などでも口を開くことはありません。況や私たち一年生にあっては、でした。それから三、四年後の紛争以後、この会食はなくなりました。居心地が実に悪かったので、なくなってよかったと言う先輩の意見を聞いたことがありました。しかし、私にとっては先生方の学問上のお話などを聴くことができて、堅苦しさはあったと思いますが、楽しく有意義であったと今でも思います。

中国文学研究室では、四月末から一ヶ月の内に新入生歓迎遠足をするのが恒例でした。今は廃れてしまいましたが、その頃はなかなかの盛況でした。先生方は必ず全員が参加され、院生・学生も殆ど全員が参加して、野外で弁当を食べ、酒を飲んで、わいわい、がやがやと談ずるのでした。当時カラオケというものはなく、誰も歌を歌うことはありませんでした。酒を飲んで、話すのが実に愉快でした。一年次は宮島の紅葉谷でした。二年次は江田島に出かけ、海上自衛隊の資料館を参観しました。その後、会場を移して酒を飲み、弁当を食べた際、幹事の我々二年生に不手際があり、後日先生方に叱られる始末でした。この時に小尾先生から作法というものを教わり、少不更事の我々にとって良い勉強になりました。また、佐伯郡大野町の妹背の滝に出かけた時のことでした。滝の上にあるダムで、小尾先生は学生を乗せてボートを実に巧みに漕がれました。先生は体重があったものですから、坐っていらっしゃった船尾がかなり下がり、前に坐る学生の方が高く持ち上げられ、三日月のようでした。私たちは少しはらはら致しましたが、先生は意に介されず、実に巧みな櫂さばきで、水上をすいすいと鮮やかに漕ぎ回られたのでした。四年生の時であったと思いますが、新入生歓迎遠足で岩国に出かけ、錦帯橋を渡り、吉香公園を見て、ロープウェイで岩国城に登り、岩国市街や瀬戸内海を俯瞰・遠望したことがありました。新緑の中に鮮やかに咲いた薄赤い躑躅、錦川の碧色の清澄な流れを今も覚えております。その週の授業の時でしたか、小尾先生は漢詩作成の課題を出されました。そこで、この岩国遊覧を題材にして、詩語・平仄や韻に苦労して、七言絶句の拙い漢詩を何とか一首作りました。後日朱を入れられ、添削されたものが返って来ました。先生曰く、「京都へ出張の折、汽車の中で添削しました」と。惜しむらくは、ノートにも頭の中にも、この処女作の詩を記録していませんので、どんなものであったか覚えておりません（却って幸いでしょうか）。先生も我々学生の拙い漢詩をよくぞ添削して下さったものだと有り難く思いました。きっと車中で気分を悪くされ、京都に到着されても食欲がなかなか起きなかったに違いありません。実に気の毒で、申し訳なかったと今更ながら思います。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

先生から授業を教わったのは、三年生になってからでした。李白詩演習（当番が資料をガリ版刷りにして用意しました）と中国文学史（六朝）であったと思います。四年生では、三年生と一緒に『文選』演習でした。巻二十九の「古詩十九首」を第一首から読みました。吉川幸次郎先生の論文を青焼きコピーしたものなどを参照して読み進めたのですが、色々な解釈があって、一首の読解もそれほど容易ではないと感じたものでした。残念ながら、先生がどのように講義・演習を進められたのか、どのようなご意見でまとめられたのか、記憶にありません。とは言え、先生はいつもの温容で、落ち着いた、静かなご発言をされたことは確かです。

三年生の時ではなかったでしょうか、先生は中国文学史の授業中（たぶん建安文学史の講義であったでしょう。以下のように、曹植に関わりがあるからです）に広島市（東区矢賀町）の新しい高天原火葬場の竣工のことを持ち出されました。普段、先生は雑談を余りされませんでした。西谷・横田両先生もそうでした（西谷先生は学部のみで、『説文解字注』「漢語音韻学序説」「荘子語法」を、横田先生からは学部で『左伝（竹添井々「歴代古文鈔」より）』「蘇東坡の文章」『楚辞』、院で「明代文学論」『明文授読』等を教わりました）。ただ、白木先生だけは雑談好きでした（学部は『阿Q正伝』『紅楼夢』「漢語語法」を、院では王力の「漢語語法論」教わりました）。授業開始後、必ず三十分ほどは新聞記事・週刊誌・文芸誌・学会とそれに附随した観光・飲食物（初めてコーラを飲まれた時の感想など）・歌手（三沢あけみなど）・入れ歯・京都帝大研究所での元曲や『四十自述』の研究会等々、極言しますと、天地間の万事を話題にして、時にはお茶や茶菓まで出して下さって、お話しされました。授業の百分（今は九十分です）全部を雑談に費やすこと、一年に二、三回はあったと思います。私たちもそれを実に楽しく聴いていたものでした。閑話休題、言帰正伝。小尾先生は「広島市から新火葬場の建物の命名を依頼されましたので、『永安館』と付けました。出典は曹植です」と言われました。それを聞いて、さすがは中国文学の大家、実によい名付けをされたものだと感心致しました。今でも中山の自宅から大内越を通り、広島駅方面へ行く時には、高天原入り口を通りますので、先生の名付けられた「永安館、とこしえにやすらかなる館」とは、実によい名だと改めて感じ、先生のことをふと思い起こすのです。

三年生の時から毎週土曜（午前中は授業がありました）の午後四、五時間、中国文学研究室で『文選』李善注の出典考証のお手伝いをしました。安東助手や院生の指導を受けてやるのです。三時になると小尾先生・横田先生がいらっしゃって、お茶とお菓子の休憩を三十分ほど取りました。その折りに分からないことを先生方にお尋ねし、疑問氷解後、また作業開始です。週末だからといって、誰かとどこかに遊びに行きたいと思うこともなく、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

まっしぐらに研究室へ行っては、この作業に取り組みました。微力ながらも先生方のお手伝いをし得たことが嬉しかったのです。中国古典文を読み、中国古典籍について様々な知識を得ることができて、実に有意義であったことは勿論です。この『文選』李善注の出典考証作業では、お手伝いの謝金を一ヶ月に一度頂いておりました。それは科学研究費から出されていたものです。謝金を頂いたこと以外にも、私達は何度か広島市内の翠町官舎の先生のお宅に招待されて、ご馳走になったことがありました。昭和四十七年から五十年頃、大学院在籍の頃でした。ある時、先生の奥様お手製の、先生のお里信州の味の一つ、醤油で煮た紫蘇の実の佃煮を出して頂き、その美味しかったことを覚えております。今も時には、郷里別府の老母がこの紫蘇の実の佃煮を送ってくれることがあります。その度に先生のお宅で頂いた、あの素朴な味を思い出します。

四年生になって、六月二日に中四国地区中国学会が鳥取大学で開催されるというので、三年生以上院生まで大多数がこの学会に参加することになりました。博士課程の院生畑野武司さん(ノートルダム清心女子高校教諭)・豊福さんは発表がありますので、大変であったと思いますが、我々四年生以下は殆ど観光旅行気分です。この旅行の前に先生から呼ばれ、七千円のお金を頂きました。それは、『文選』李善注出典考証作業の謝金でした。謝金は通常二、三千円でしたから、この七千円は普段のそれの二、三倍でした。当時、七千円あれば二週間ほど過ごせましたので、余りの多額なのに驚きました。先生は「鳥取の学会の費用の足しにして下さい」と言われました。六月一日に広島を出て、岡山で乗り換え、津山経由で鳥取へ行きました。鳥取に二泊して(発表が終わった二日の晩、安東さん以下全員が、それぞれ宿舎にビール・日本酒など二本ずつをこっそり持ち込んでどんちゃん騒ぎをやりましたが、ここには触れません。先生方は一切ご存じないはずです。その外、砂丘や白兎海岸に観光に行ったような気がします)、三日は松江へ向かいました。小尾先生・横田先生(西谷・白木両先生はそれぞれに別行動)の後ろについて、全員が一緒に松江城・小泉八雲旧居など見て、その日は玉造温泉駅から少し歩いた、宍道湖畔の国家公務員の宿舎(今は廃止されてありません)に泊まりました。その夜は安東さん達と中文駄洒落大会を開いて、遅くまでわいわい騒ぎました。翌日、広島行きの急行列車が午後二時過ぎであったので、午前中玉造温泉街を見物しました。玉湯川沿いの道を歩くと、何とヌードスタジオばかりです。小尾先生が横田先生に「これは晩に来なくてよかったですね」と言われました。それを聞いていた、院生や我々は「実に残念。晩にこそ来るべきだったなあ」と冗談半分に言ったことを覚えています。その後汽車に乗り、出雲坂根のスイッチバックで汽車が停まるので、ホームにある延命水を皆で飲み、出発です。備後落合駅の停車で先生方と駅蕎麦を食べ、夕

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

暮れなずむ広島駅に無事到着して、この楽しい旅行は終わりました。この旅行中に何処であったか、桑の実が黒紫に熟れていたのを見掛けました。今でも六月初め桑の実の熟れたのを見ると、この楽しかった鳥取旅行を思い出します。こんな楽しい旅行から何个月も経たないうちに、あの思い出しても決して愉快ならざる（当然でしょうが）、広島大学紛争が起こったのでした。

四年生になれば、卒業論文の題目を決めて論文を書かなくてはなりません。それまでは『孟子』の語法か何かをと考えて、教養部教授三迫（さんのはざま）初男先生のご指導を受けつつ、『孟子』や文法書を読んでいましたが（先生から『論語』『唐詩選』「唐代古文」「唐代小説」「宋詞」「元曲」と幅広く授業を教わりました）、結局『説文解字』を扱うことにしました。二年生の時、西谷先生から段玉裁『説文解字注』の講義を受けたことがあったからでしょう（先生から『十三経注疏』全巻の精読をと何度もご指導を受けました）。『説文解字』劈頭の「一」字から始まりました。先生が例の几帳面な字（今も研究室の何かの書籍に「小心翻閲」などの毛筆の字が残っているはずです）でガリ刷りにしたプリントを用意・配布され、先生ご自身が訓読され、解釈をされるものでした。さて、『説文解字』の音注「読若」について、段氏の意見を究明しようと私は考えました。ある時小尾先生に呼ばれて、「これを読んで参考にしてはどうですか」と言われ、渡されたのが岡山大学教授福田襄之介先生の博士請求論文『説文解字の研究』でした。それは、福田先生のあの実に上手な字で書かれた論文を青焼きコピーにし、製本したものでした。まだ審査中の論文をこっそり見せて頂けるなどとは思わなかったものですから（そもそも、福田先生が博士論文を広島大学に提出されていたこと自体知りませんでした）、私はびっくりすると同時に、大変有り難く感じました。福田先生の岳父は、広島高等師範学校の教授をされていた、『玉篇の研究』『日本漢字学史』等で著名な、あの漢字学者岡井慎吾先生でしたので、「福田先生の所には岡井先生蒐集の良い資料が沢山あって、少しずつ利用しては論文を発表されているのですよ」と、小尾先生は言われておりました。

四年生の九月、大学院修士課程の入学試験を受けました。小尾先生が出されたのは、『晉書』陸機伝でした。白木先生出題の現代文中の「舎不得喫」が訳せなかったこと、英語（日訳二題・英訳一題）ができなかったことで、合格できるのかどうか気をもんでおりました。一週間ほど経ったある日の午後、私が研究室で勉強しておりますと、小尾先生が入って来られました。その時、私がいることに先生は気付かれていたのでしたが、何もおっしゃらず、用事を済まされると、そのまま出て行かれました。さあ、そこで私は非常な不安を覚えました。それまでは掲示による正式な合格発表前でも、教授会の判定後であったからでしょう、合格者に先生は「〇〇君、合格しましたよ」と告げられていた光景を何度か目にし

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

たものでした。ところが、私の場合、先生は何もおっしゃらないのです。やはり、駄目であったかと落胆も啻ならずでした。それでも、発表の日に一応確認の為に掲示板を見に行きました。何と合格でした。その直後、小尾先生にふと出会い、先生が「狩野君、合格でしたよ。研究室でお知らせするのを忘れておりましたが」と言われて、私は肩すかしを食ったように思うと同時に、やれやれと安堵致しました。なお蛇足ながら、西谷先生にお会いした時には、先生が「狩野君、君は英語がなかなかよくできておりましたよ」と言われ、私はそんなはずはないと思っていたので、面食らったことでした。

四年生の秋ぐらいから広島大学の紛争が激しくなりました。大学院修士課程の一年生になってからは、授業などありません。十二月ぐらいになって、やっと講義再開でした。再開されたものの、小尾先生の授業には博士課程の豊福さんと私の二人しか出ません。授業は「六朝文学論」（講義）と「文選集注演習」でした。先生は我々に気を大変遣われていました。講義が終わると、毎週決まって大学にほど近いレストランに行っては昼食をご馳走して下さるのでした。そこで、勉強のことや日常生活のことを気軽に我々にお尋ねになり、色々とご意見をおっしゃるのでした。長い紛争で、先生は心身共に非常にお疲れになっていらっしゃったと思います。それでも先生にとって、その時間は何とか授業ができて、暫し心の平静が得られたのではなかったでしょうか。

博士課程に進学した昭和四十八年の五月末、中国四国地区中国学会が島根大学で開かれました。修士論文を基にして発表することが恒例でしたので、私も『文選音決』の声類の一問題を取り上げました（今思えば、私が『文選音決』の研究を自分の専門とするようになったのは、昭和四十七年四月に修士論文を、どんな問題を、どんな資料を使って書くのかということについて、先生の所にご相談にお伺いし、先生から「『文選音決』をやったらどうでしょうか」と、ご指導を受けたことに由るのでした。この時には、西谷先生も白木先生も停年でおやめになっていて、中国語学講座の指導教授がいなかったのです。『文選音決』が私の一生の研究対象になろうとは、何という先生の学恩なのでしょうか。しみじみと先生のご恩を思うのです）。発表の予行演習の時であったでしょう、小尾先生は「聴く人間は皆カボチャで、大した者はいないと思いなさい」と、あからぬコツを伝授して下さいました。更に、「発表時間を厳守して、一秒でも時間超過は頭の悪い証拠で、絶対に駄目です」ともご指導頂きました。この時の発表、更にはその秋の日本中国学会（九州大学）での発表は、何とかご指導通りにやれたのではないかと思います。その後、教員となって何遍か発表することがありました。ところが、大学院生時代とは逆に、時間超過も常のことで、先生の言われた「頭の悪い証拠」を実演するというざまでした。私自身はできないくせに、今では学部生や院生の発表には、先生の言

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

われた注意をお話しするのです。

昭和六十二年の七月下旬、信州茅野市の旅館で『水経注』を読む研究会を開きました（研究会とは名ばかりで、観光をして酒を飲んでばかりでした。参加者の富永一登広島大学教授・福井佳夫中京大学教授・市瀬信子福山平成大学助教授の三氏には申し訳なし）。最終日に、皆で諏訪の小尾先生宅にお邪魔しました。二階の先生の書斎に上らさせて頂いて歓談した後、先生が昼食をご馳走して下さると言うので、鰻屋に行きました。先生がそこのご主人に依頼されて書かれた軸が、座敷に掛けられていました。「功之成非成於成之日」というものです。「これは何と読みますか、読んでみて下さい」と言われました。我々が何か答えた後、先生がこれを解説されて、どんな功績も完成した日に完成したのではなく、それ相応の準備期間や努力があったのだということを話されました。なるほど確かにそうだ、学問然りと感じ入ったことでした。私は先生が箸を着けられなかった鰻重を厚かましくも頂戴して、それから独り野辺山の宿に泊り、晩飯が付いてなかったので、先生の鰻重を有り難く頂いたのでした。

十五年以上も前から、名誉教授古田敬一先生宅で月に一回『拍案驚奇』を読む会をやっています。というのも、我々中国語学中国文学研究室に尚友堂版のそれがあり、ただ蔵するだけでは勿体ないということで、俗文学を専門としない何人かで始めました。今では白話文学を専攻する大学院生も加わって、邦訳のない巻三十一から巻四十までの訳注を出すことになりました。昨年の春やっと巻三十一の訳注を汲古書院から出版しました。出版後、送付者名簿を作り、関係の先生方や嘗ての参加者に一部ずつお送りすることになりました。その時、相当の経費を負担された古田先生から小尾先生に一本を贈呈されました。その後、先生の古田先生宛のお礼状を読ませて頂きました。小尾先生のお喜びが文面から伝わって来ました。先生は六朝文学を専攻されましたが、天下の孤本広島大学本『拍案驚奇』を研究する者がおらず、空しく蔵するだけであることを常々気に掛けていらっしゃったのではないかと思います。私達の拙訳ながらも、先生に第一巻を差し上げることができて、本当によかったと思います。昨年秋、研究資料調査で上京した帰途、是非先生にお会いして、現在進行中の『拍案驚奇』巻三十二のことなどをご奉告申し上げたかったのですが、結局それも叶わず、本当に悔やまれてなりません。

先生の思い出は、まだまだ書き切れませんが、紙幅が尽きました。大学の教員として学生・院生を指導する今となっても、小尾先生から教わりたい、学んでおきたかったと感ずることが時折ありますが、その機会は永遠に失われました。今はただ、先生から頂いた、多大な学恩に感謝し、それに報いるべく努力したいと思います。

先生のみ霊の永えに安かならんことを。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

NII-Electronic Library Service